医療法人社団英明会　大西脳神経外科病院

Ohnishi Neurological Center

大西脳神経外科病院だより　第48号

ぷれいん

発行日：令和６年２月吉日
発行：学術図書委員会
発行責任者：大西　宏之
編集責任者：吉野　孝広

コロナからの脱却 そして変革へ

医療法人社団英明会
大西脳神経外科病院
理事長・院長　大西　宏之

皆様、新年、明けましておめでとうございます。

新たな年の初めを迎え、皆様には健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。また昨年は新体制で新たなスタートが始まり、色々と戸惑いもあったかと思いますが順調な滑り出しで例年以上の水準を維持できたこと、これは皆様方の頑張り、協力なくしては達成できなかったことです。まずは御礼を申し上げたいと思います。さて、昨年４月からの新体制を振り返ってみたいと思います、まず取り組んだことはコロナ前の平常の状態に戻ることでした。

今回、この理事長交代というのは、近年のコロナ禍によって閉鎖的な、そして混沌とした雰囲気を一新したいという思いがあったからですが、なんとか、コロナ前の状態に戻りつつあるのではないかと思います。入院患者の面会制限を解除することでトラブルも少なくなっているように思いますし、対外的なことでは病診連携の会を懇親会つきで再開しました。近隣病院への施設訪問やさまざまな研究会も行いました。院内に目を向けますとスタッフ間の連携を図るべく、多くのレクリエーションや忘年会が再開され、以前に比べ顔の見える連携が図れるようになったのではないかと思います。

このように以前では当たり前であったことができるようになって初めて混沌とした雰囲気から脱却し新たなチャレンジをしようという機運になってきたように思います。昨年４月、所信表明の挨拶でも、今後の取り組みとして３つの柱を挙げさせていただきました。医療安全・危機管理対策、スタッフの人材育成、そして最新技術の導入という3つの基本方針に沿って進めてきましたが、いずれもまだまだ始まったばかりでようやく種が蒔かれただけの状態です。医療安全については現状の課題から洗い出し、それを元に今年度、新たなプロジェクトを進めていきます。人材育成に関しては、ドクター教育や新たな人材発掘・離職防止に向けたプロジェクトが始まっています。そして、最新技術という点では、電子カルテの更新や最新MRI機器の導入なども本格的に始まりこれによって業務の効率化が期待できるかと思います。また今年度、回復期病棟の増床計画も本格的に進んでいきます。このようにまだまだ始まったばかりですが、なんとか新たなチャレンジをしていきたいという雰囲気になってきただけでも、本当に良かったと思っています。

ただこれからはこの蒔いた種が芽をだし、花を咲かせていくためには、さらなる皆様方との共同作業が必要です。ぜひ、これからも当院の発展に向かって皆の力を結集して一緒に取り組んでいきたいと思っています。また社会に目を向けますと、今年は「医療・介護・福祉の診療報酬トリプル改定」や「医師の働き方改革」、「医療Dxの推進」などがスタートする社会的に見ても大きな一年になります。ですので、当院としてもこの社会の変革に柔軟に対応できるよう十分な準備を進めて参ります。

このような改革を行うためには、もちろんコミュニケーションの中での信頼関係がなければ達成することができません。

昨今の危機管理対策でも、ヒューマンエラーの大半はコニュニケーションエラーの結果であることが言われています。対患者さんはもちろんのこと、スタッフ同士においても風通しをよくして良好な信頼関係を築き、そしてさらなる素晴らしい医療が今年も展開できることを期待しています。

「楽しい職場を目指して」

あけましておめでとうございます。

1月1日に石川県能登市を中心に地震が起き大変な一年の幕開けとなりました。今から29年前の1月17日に阪神淡路大震災が起き神戸の街が廃墟と化す大惨事となった当時を思い出します。ビルは倒れ、高速道路は分断され、火災が起き、当時その中に私も居ましたが悲惨な状況を鮮明に覚えています。今回新年早々に起きたこの地震でも多くの方がなくなられています。お亡くなりになられた方々には謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆さまに心からお見舞いを申し上げます。また、この瞬間も被災者の救済と被災地の復興支援のために尽力されている方々には深く敬意を表したいと思います。

日本は非常に災害の多い国です。常に危機管理が必要だと言うことは間違いないのですが当院でも形だけの防災ではなくいざという時のために本当に動ける様な準備をしておかなくてはなりません。

医療法人社団英明会　　会長　大西　英之

それと今年は病院としてもいくつかの大きなイベントを計画しています。一つはPACSの入れ替え、２つ目はMRI２台の入れ替え工事、３つ目は北3階病棟の改築です。コロナ禍でできなかったハード面での工事を行っていく年になります。2000年に開設して以来最先端の医療を病院の理念として掲げてきました、今年さらに大きな発展に向けて設備投資の年にしていきたいと思います。

とはいえいくらハード面が整ってもそれを使う人材が整っていなくてはなりません。職員の皆さんもやりがいのある楽しい職場を目指してともに進化していけたらと思います。今年もよろしくお願いいたします。

「箱根駅伝」2024を見て

名誉院長　久我　純弘

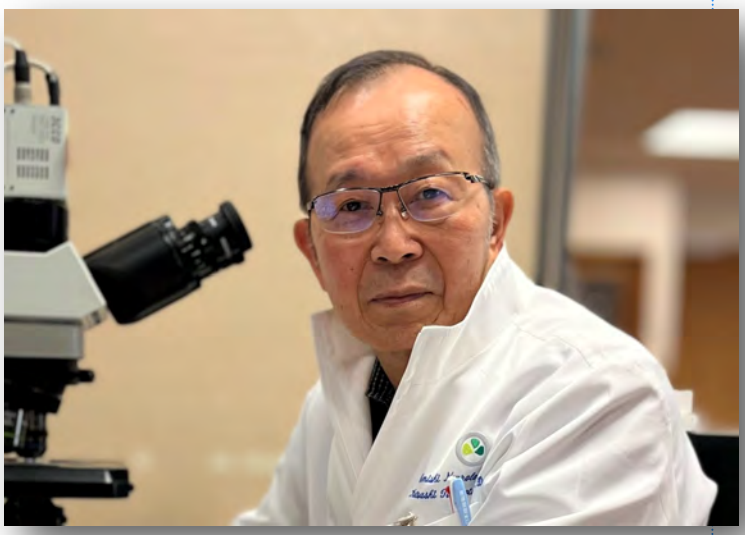
毎年、箱根駅伝をテレビで見ることが我家の正月行事となっています。今年は大学三大駅伝三冠を昨シーズンに成し遂げ、今シーズンもすでに出雲駅伝、全日本駅伝を勝利し最後の箱根駅伝で優勝すると三冠2連覇となる駒澤大学が最有力候補となっていました。各チーム上位10名の10,000m平均タイムは上位から駒澤大学28分8秒6、青山学院大学28分24秒4、中央大学28分26秒でした。これから計算すると駒澤と青山では10㎞で約16秒の差があるので箱根駅伝217㎞では347秒（5分47秒）差で駒澤勝利の予想となります。ところが結果は青山学院が10時間41分25秒の大会新記録で10時間48分の2位駒澤に6分35秒もの差をつけて総合優勝でした。予想を覆すこの大差での勝利の要因は何だったのでしょうか。選手の配置、調整など監督の采配の差でしょうか？3冠2覇を目指す駒澤にプレッシャーがあったのでしょうか。大きな要因は原監督も言っているようにチーム全体に勝ちたいという意識が非常に強かったことではないかと思います。

私たちは仕事をしている中でも色々な感情、意識が働きます。病院が正しい方向に進み、望まれる医療を提供するには職員全員の意識が大切です。ほぼコロナ禍を脱しましたが、コロナ禍の初期において当院でもクラスターが発生し約2週間の病院機能の停止を余儀なくされました。この間、明石市救急だけで約100人近い脳卒中などの救急搬送に影響を及ぼしました。このことからも当院がこの地域の神経救急にいかに重要な立場にあるかが分かります。

脳卒中、外傷などの救急医療だけではなく脳腫瘍、てんかん、脊髄疾患など非常にたくさんの神経系の病気がありますが、これらの医療において当院は地域の人々から頼られ、なくてはならない病院であると思います。どうか職員の皆様、当院が「なくてはならない病院」であることを自覚して地域の人々により満足していただける医療を提供できるよう職員皆様の一致した強い意識を持って今年も研鑽、努力していただければ地域の人々、職員の皆様にも幸福な年になることと思います。今年もどうかよろしくお願いします。

駅前クリニック8年目を迎えて

明けましておめでとうございます。
2016年12月に開院した大西脳神経外科病院附属明石駅前クリニック(通称大西脳外科クリニック)は2017年1月4日から診療を開始し、今年2024年の1月で丸7年になります。クリニックはJRや山陽電車の明石駅から徒歩１分の、雨でも傘なしで行ける便利な「パピオスあかし」の3階にあり、大久保町江井島にある大西脳神経外科病院(本院)と密に連携して、明石市東部や神戸市の西部在住の方を中心とした神経疾患の『町のかかりつけ医』として診療に当たっています。



明石駅前大西脳外科クリニック　院長　埜本　勝司

JRや山陽電車を利用すれば本院よりも交通は便利で、症状の安定している方で薬物療法が主な受診は時間的にも節約できるため、今では明石市東部の患者さんだけでなく、大久保より西部の加古川や、姫路からも通院してこられる方が増えました。本院からベテラン医師の派遣があり、患者さんの情報を含む全ての医療情報を共有して、一体となって診療していることが特徴で、待ち時間も少ないことから好評を戴いておりますし、新患の方はとりあえず診察を受けて、必要であれば本院で詳しく検査してもらおうという方も多くなってきています。職員にとっては専用の光ケーブルを通して本院で毎朝行われている症例検討会を聴講することが出来ますし、手術もリアルタイムで見る事が出来ます。クリニックから依頼した患者さんの検査結果も直ぐにわかるため、患者さんの要望に従って本院でもクリニックでも結果説明や治療が出来る体制になっていることは利便性が高い医療サービスと思っています。

腫瘍の手術に関しては、術中の迅速病理診断の役割も担っており、双方が協力しながら患者さんに最善の治療が行われるよう協力し合っています。開設２年目から始めました昼休みのミニ講座は、コロナ感染拡大で開催が困難となった3年間の休止を除き、昨年から再開しました。毎月第３水曜日の午後のひととき、身近な問題を取り上げて話題を提供することで患者さんに喜ばれており、肩の凝らない情報交換は診察時とは違った楽しさがあります。患者さんとの信頼関係は医療の要であり、診療所としての最重要課題です。限られた施設の設備やスタッフの能力を最大限生かしながら、患者さんに頼りにされるクリニックでありたいと願っています。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

「旭屋書店　梅田本店」

先日、2011年に閉店した梅田の旭屋書店本店に勤めていた方が入院され、昔話に大いに花を咲かせた。ビルの１階から７階までエスカレーターでフロアを移動すれば、そこには文芸書、雑誌、漫画、理工学書、医学書、美術書、楽譜に至るまでありとあらゆるジャンルの大量の書籍と、フロア毎に異なる雰囲気のお客さん。今でこそ当たり前の大型書店だが、小学生の頃に初めて父親の所用で一緒に行った際、激しく衝撃を受けたことは今でも鮮明に覚えている。

紙とインクの（心地よい）匂いが充満し、この世のありとあらゆる知識が詰め込まれている（と勘違いしていた）「夢の世界」に興奮を覚えた。梅田が通学路になってからは当然寄り道し、時に数時間立ち読みし、自分が知らない世界を渡り歩いた。医学書に関しては読めばそれなりに理解できるものの、わかりもしない数学書や工学書を開いて未知の概念を知り、宗教哲学書を手に取ってはすぐ断念し、果ては自分が入学する（筈の）大学周辺の賃貸物件情報やおいしいお店まで逐一チェックしていた。間違いなく文芸書や参考書のフロアよりその他のフロアに居た時間の方が圧倒的に長く、時に我慢できずに医学書や化学書を購入してしまい、よく母親に呆れられていた。若気の至りや必要以上の背伸びであったが、インターネットのない時代の中高生にとってこの世の広さを実感できる至高の空間であった。なお同じ梅田の書店でも、阪急の駅の真下にありデートの待ち合わせ場所にされがちな小洒落た紀伊国屋書店より、マニアックな雰囲気が強い旭屋書店の方が大好きであった残念ながらビルの老朽化と書籍通販化の影響にて閉店されたが、この店から受けた影響は計り知れず、感謝に堪えない。

世の進歩は人の想像をはるかに超え、30年以上前に自分が旭屋書店本店からいただいていた情報（もちろん99.99%以上は立ち読み）など、今やスマートフォンがあれば誰でもどこでも一瞬で入手可能である。膨大な情報量に加え、ご丁寧に解釈や解析を加え、AIがそのクオリティーを底上げし、いろいろなプラットフォームで提供される。音声動画情報、VRによる疑似仮想体験まで得られ、情報の質も大きく変わった。指先や音声の指示だけであらゆる情報がすぐ手に入り、かつての旭屋書店での労力（といっても楽しみでしかなかったが）が、滑稽なほどに無駄な行為に思えてしまう。

副院長　山本　慎司

一方で、「人生の質は、どれだけ多くの無駄を重ねるかによる」と授業中に説いていた高校時代の物理教諭の口癖を思い出す。「無駄」の語源はキャラバンで荷物（「駄」）を積まないで歩いている馬のことで「稼ぎにならない」ことを意味するそうだが、それはあくまでも目先の稼ぎのことであり、その馬がいなければ稼ぎの増加が図れない。「すぐに実績が出ないが、今後の発展のためには必要」という解釈が忘れられている。

AIが社会の大部分に関わるこれからの時代、人間の価値はその人が保持している知識の多さではなく、個人として「幸せとは何か」「宇宙とは何か」といった哲学的な、正解が存在しない問いに対する深い意見、考察が行えるかどうかが重要とされる。そのためにはこれまで経験してきた「無駄」の多さが不可欠になる。今になって先達の言葉が沁みる。

昇り龍のごとく

事務部 部長　藤井　健

コロナ禍が一区切りしてから初めての新年を迎えました。昨年は１月の寒波による大雪で交通網が麻痺して波乱の幕開けとなりましたが、４月から北館の外壁補修工事を半年かけて実施し、地域連携協議会などの恒例行事もコロナ前同様に開催されるなど、活気を取り戻した１年になりました。

その勢いのまま、今年は１月からMRI２台の入替え工事を２期に分けて行い、４月以降には回復期病棟を10床増床するための改修工事などが始まる予定です。まさにコロナ禍でストップしていたことが一気に動き出します。

一方で２年ごとの診療報酬改定があり、医師の時間外労働の上限規制が始まることもあり、医療を取り巻く環境に大きな変容の起る年でもあります。また、引き続き物価高騰の影響を受けながらの医療経営が求められています。

このように内も外も変わっていく年になりますが、コロナ禍前まで、変わることは当院にとって毎年恒例のことで、変わり続けてきた20年でした。

12年前のブレイン拙稿は、次ぎの勇ましい文章で結ばれていました。

今年も、昇り龍のように果敢に、医療と諸課題に取り組んでいきましょう。

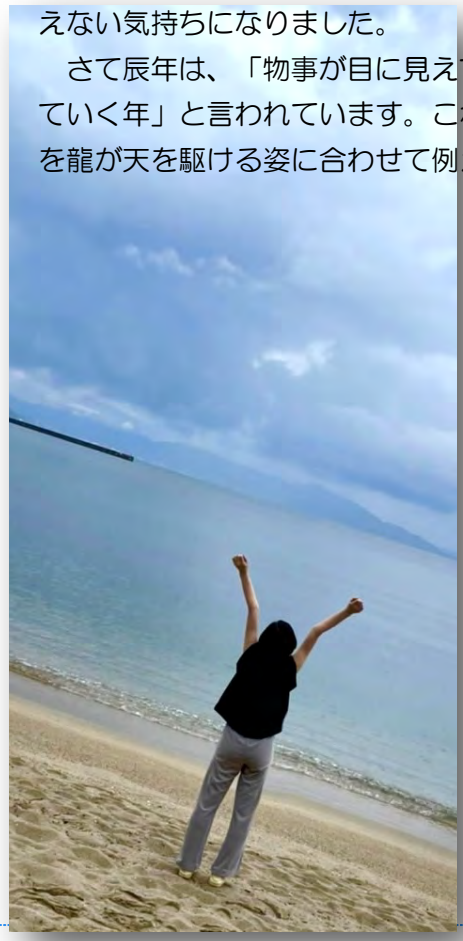
「しなやかに」

看護部　部長
前田　ゆうこ

明けましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症が5類へと変わり、次に向かって様々なプロジェクトを準備する「癸卯（みずのとう）」という年になりました。その中でも、人との関わりやコミュニケーションに関しては、以前のようにいかないまでも距離感は縮まり私自身、新たな出会いや親交を深めることができた貴重な年になりました。2030年の少子高齢社会問題をはじめ様々な問題解決のためには地域での医療連携を深め、ネットワークを構築することが課題と言えます。対面による施設代表者の会議に参加して改めて感じることは、施設の規模に関係なくどこも同じ様な悩みと課題を抱えており、直接意見交換することでお互いの関係性がより深まるということです。院内においても、withコロナとして様々な行事が再開され、久しぶりにマスクなしの笑顔を見て、何とも言えない気持ちになりました。

さて辰年は、「物事が目に見えて大きく動き、変わっていく年」と言われています。これは成長と変貌する様を龍が天を駆ける姿に合わせて例えられたものです。



昨年、開始した看護部の人材プロジェクトや次世代リーダー育成プロジェクトなど本格的に取り組む年となります。診療報酬のトリプル改定もあります。これらの取り組みが成長に繋がるよう努めたいと思います。

以前、「しなやかに」仕事をしなくてはと言われたことがあります。しなやかにとは、「柔軟で流れに逆らわないけれど、自分らしさをしっかり持っている」という意味で使われるとのことです。その言葉を聞いて、今の時代に重要なことだなと印象に残り、時々思い出します。様々な課題が山積していますが、「患者・家族の立場で寄り添う看護」という軸を常に持ち、看護の喜びを共有できるしなやかな組織作りを目指していきたいと思います。

「小善・大善」

医療技術部　部長　吉野　孝広

「小善は大悪に似たり、大善は非情に似たり」。これはビジネス講座などで良く使われる仏教用語です。似たような言葉に“老子”の「空腹者に魚を与えるな、釣り方を教えよ」という格言があります。どちらもその場しのぎの優しさは長期的にみるとその人の成長のためにはならない、非情に思える厳しい姿勢はいずれその人の成長につながるという意味でつかわれます。数年前に当院で管理職研修が開かれたときにこの言葉を初めて聞きました。その時に自問自答し、大西会長や理学療法士の師である宇都宮先生は厳しくもあり優しくもあったことを改めて思い出しました。管理職としての責任を強く意識した瞬間であり、開院当時に理不尽すぎると思ったことも管理者として私の成長を考えての言葉であったと、今更ですが実感します。役職者としての最大の罪は部下に対して無関心であることだと思います。気にし過ぎてつい感情的になることも多いので注意しなければと思うのですが、厳しい言葉の裏にはスタッフへの強い関心と医療に対する情熱があるからだということを感じていただけると嬉しいです。いま新たなプロジェクトが幾つか開始されています。特に人材育成についてはいろいろな形で関わっていこうと思っています。今年も医療技術部スタッフともどもよろしくお願い申し上げます。

「未来の礎に」

薬剤部　部長　田中　一穂

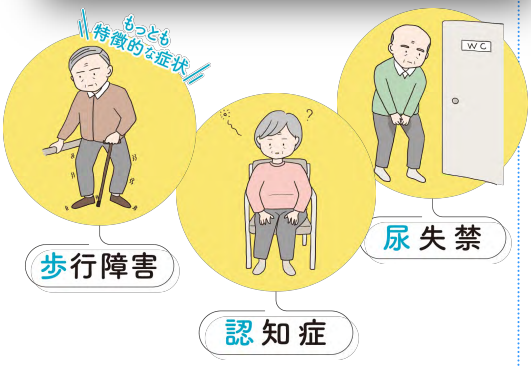
「古いバイオリンが叔母の家にある」という話を子供の頃から聞いていました。その叔母が亡くなり実物を確認すると裏板には「Stradivarius」の刻印が。一同騒然としましたが鑑定の結果はレプリカ品。今はもう一人の伯母が保管しています。
ストラディバリウスの音色は現代の技術でも再現が難しいと言われていますが、当時の気候は今より遥かに寒冷で、木材の年輪がきめ細かく、同様の材料の入手が難しいことも理由のひとつという話を聞いたことがあります。しかし、同じような材料は当時のバイオリン職人であれば入手できたはずですからやはりアントニオ・ストラディバリは誰もが認める優れたバイオリン職人だったのでしょう。
　現存する「Stradivarius」と呼べるバイオリンは520挺ほどとのことですが、後の世になっても評価され続ける業績というのはすべてのプロフェッショナルの目指す憧憬ではないでしょうか。未来への礎に今年１年、また新たな気持ちで臨みたいところです。

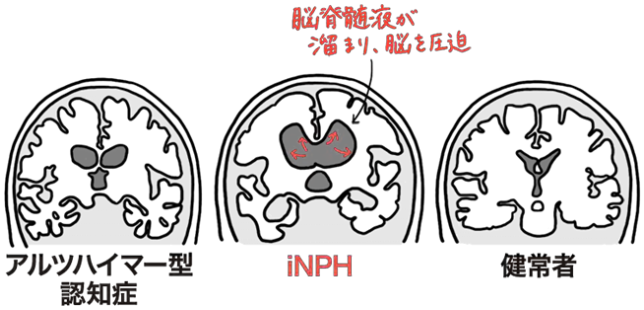
正常圧水頭症　－高齢者の治る認知症や歩行障害を見逃さない－

脳腫瘍・頭蓋底外科センター長　*髙橋　賢吉*

新年あけましておめでとうございます。新しい年が皆様にとって健康で充実したものとなることを心より願っております。
さて、新年号ということで何を書こうかと考えたのですが、今回は急速な高齢化に伴い認知症や歩行障害が増えています。その原因疾患の中でも手術で治せる正常圧水頭症についてご紹介させて頂きたいと思います。

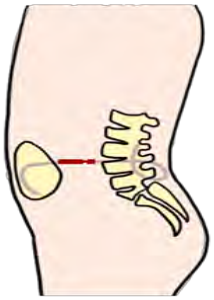
日々の生活のなかで、半年ほどの経過で転倒を繰り返し物忘れがひどく、会話のつじつまが合わなくなったり、頻尿や失禁で困るようになった方はおられませんか？
正常圧水頭症は稀な疾患ではなく、高齢者の2~9%に認められ、その90%以上が見逃されています。
正常圧水頭症の患者数はアルツハイマー病の約1/5で、パーキンソン病の2~3 倍です。好発年齢は70～85歳で、３徴候である小股すり足歩行・認知機能低下・尿失禁のいずれも老化現象として見逃されます。CTやMRIの脳室拡大は脳萎縮と間違われることが多く、脳萎縮と水頭症の鑑別方法は未確立です。パーキンソン病と歩行は類似していますが、手指振戦がないことが特徴です。



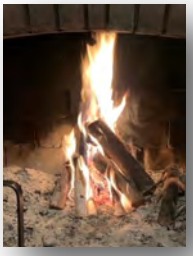


正常圧水頭症は進行性の病気です。早期治療により症状はほぼ消失しますが、進行してからの治療では症状の改善が得られ難く、早期発見・早期治療が重要です。一般的な脳室腹腔シャント術では頭蓋骨を穿頭して脳を穿刺する必要がありましたが、当院では腰椎腹腔シャント術を行っており（下図）、背中と腹部の小切開のみで手術時間も40-50分と短く低侵襲であり、年齢制限もありません。

検査は頭部CTで脳室拡大の有無や脳萎縮の状態を確認し、症状と合わせて正常圧水頭症が疑われれば、タップテスト（髄液排出試験）を5日程度の入院て行います。手術は全身麻酔下に行い、10日前後の入院で可能です。外来診察は、問診と頭部CT検査で比較的簡単に行えますので、症状で悩まれている方がおられましたら、気軽に受診もしくはご紹介頂ければ幸いです。



編集後記

新年早々に北陸で地震が起き多くの方々がなくなられました。お悔みを申し上げますと共に、被災された皆様にお見舞い申し上げます。
私たちの日常はこうした状況でも変わらず過ぎていきます。旅行に行ったり美味しいものを食べたり友人と、家族と楽しく会話ができます。無事新しい年が迎えられたことに感謝しなくてはいけないなと思います。できることは少ないですが色々なことを一生懸命することが大切なのかなと思います。ということで今年もぶれいんをよろしくお願い致します。

（吉野）